

第9章-3 17~18世紀ヨーロッパの文化

バロック時代の風潮

「死を忘れるな Memento Mori」→「生を楽しめ」「人生は一幕の演劇」
→シェークスピアに始まる演劇の興隆→古典主義文学、バロック=オペラ

<美術>……王侯の宮廷中心（←それ以前は教会中心）

◎ _____ 様式……17世紀 (Baroque、ポルトガル語で「いびつな真珠」の意味)
曲線の入り組んだ不規則な装飾、流動感、明暗のコントラスト etc.

絵画 { フランドル…… _____ (1577-1640) 『マリ・ド・メディシスの生涯』
ファン・ダイク (1599-1641)
スペイン …… _____ (1541-1614、ギリシア・クレタ島出身)
_____ (1599-1660) 『女官たち』
オランダ …… _____ (1606-69) 『夜警』

建築 _____ 宮殿 (フランス王 _____)

◎ _____ 様式……18世紀 (Rococo、“石”の意味、石や貝殻で洞穴の周囲を飾ったことから)
洗練された繊細な美、軽妙優雅な装飾性

絵画 _____ (仏、1684-1750) 『シテール島への巡礼』

建築 _____ 宮殿 (Sanssouci =フランス語で「憂い無し」の意味)
ベルリン近郊ポツダム、プロイセン王 _____

※シノワズリ (中国趣味) ……17世紀後半から19世紀初めにかけての中国趣味のこと
サンスーシ宮殿にも「中国館」がある

<音楽>……バロック音楽

- ・宮廷劇場におけるオペラの始まり
- ・コーヒーハウスなどでの器楽合奏

ドイツ…… _____ (1685-1750)、 _____ (1685-1759)

<文学>

◎ _____ 文学

フランス……リシュリュー創設のフランス学^{アカデミー}士院によるフランス語の統一・洗練
→18世紀啓蒙主義時代ヨーロッパの国際語に

悲劇作家…… _____ (1606-84)、 _____ (1639-99)
喜劇作家…… _____ (1622-73)

↓
のちドイツで大成(→p.237) …… _____ (1749-1832)、 _____ (1759-1805)

◎イギリス・ピューリタン文学

_____ (1608-74) 『 _____ (Paradice Lost)』
クロムウェルの外交秘書、激務で失明、王政復古で逮捕、処刑はまぬがれ当書を口述筆記
_____ (1628-88) 『 _____ (The Pilgrim's Progress)』
王政復古後に非国教徒の集会で説教したため 60-72 投獄、75 再投獄半年、当書を獄中執筆

◎イギリス海洋文学

_____ (1660-1731) 『 _____』 = 社会・経済史の資料
_____ (1667-1745) 『 _____』 = 政治・社会風刺

<自然科学>

ルネサンス時代……コペルニクス、ガリレイ、ケプラー
↓

_____ (1642-1727、イギリス、1696-造幣局長、1703-王立協会会長)
3大発見……光の分解、 _____ の法則、微積分法
Philosophiae naturalis principia mathematica
1687 『 _____ (自然哲学の数学的原理)』 = 古典物理学確立

_____ (スウェーデン、1707-78) ……植物分類学、生物の学名を命名
_____ (仏、1743-94) ……質量保存の法則、大革命で徴税請負人の前歴により処刑
_____ (英、1749-1823) ……種痘法
ラプラス (仏、1749-1827、ナポレオン政府で内相・伯爵、復古王政で貴族院議員・侯爵)
ガス状の物質から星が生成 (初めカントが唱えラプラスが基礎づける)
カント=ラプラス説

<哲学>

◎イギリス _____ 哲学

_____ (1561-1626)
1613 検事総長、16 枢密顧問官、17 国璽尚書、18 大法官、21 汚職で訴追
1620 『 _____ (新機関、Novum Organum)』
_____ ……経験から一般法則を導き出す考え方

ホッブズ (1588-1679) ……実在するのは物体とその運動のみ。
普遍的実在などというものはない=唯名論
自然現象だけでなく心的現象も物体の機械的運動による。
外的物体が感覚→記憶となり、知識の源泉となる。

ロック (1632-1704) ……人間の生得観念を否定。
生まれたときの心は「白紙 (タブラ・ラサ)」。
白紙の人間が観念を持つのは、全て「経験から」である。

ヒューム (1711-76) ……懐疑論 (不可知論)
経験論を徹底すると、事物間の因果関係は必然ではない。
(経験をいくら重ねても、法則そのものは経験できないから)

◎大陸 _____ 哲学

_____ (仏、1596-1650、49 スウェーデン女王に招かれるが滞在半年で肺炎で死去)
1637 『 _____』
方法的懐疑→第1原理「Cogito, ergo sum (我思う故に我在り)」
_____ ……原則をもとに数学的な証明の手続きで個々の事象を論証

_____ (蘭、1632-77)
ユダヤ商人の子、56 家業破産で廃業し、信仰も捨てユダヤ教会から破門
汎神論……唯一無限なる存在=神=自然そのもの、と考える

_____ (独、1646-1716)
数学者……ニュートンとは別個に微積分法考案 (現在微積分で使用する記号を導入)
物質の最小単位 = 「モノド (単子)」
モノドは変化せず、その組み合わせが変わるだけ (現在の原子論の基)
唯一絶対の完全者である神以外のモノドは、全て神によって作られる

◎モラリスト

モンテーニュ 『随想録 (エッセー)』 (→ルネサンスの項、p.175)

_____ (仏、1623-62)
1639 円錐曲線理論、42 計算機、48 液体の圧力に関するパスカルの原理、54 修道院客員
遺稿 『 _____』 ……人間は考える葦である

- ◎ 哲学……イギリス経験論と大陸合理論の統合
(独、1724-1804)
- 『 』……科学的認識能力の分析 →コペルニクスの転回
理性には経験を認識する「時間・空間・因果律」という枠組が内在する。
知識とは単に経験を白紙に書き込んだものではない (⇔ヒュームの懐疑論)
 - 『 』……道徳的理性の分析
理性には人類に普遍的な道徳法則＝「道徳律」が内在する。
この内面からの命令に従うことが真の自由である。
 - 『判断力批判』……自然と道徳とを「美」と「合目的性」で統合する「反省的判断力」
- また
『 』(1795)……国際的平和機関の提唱

<政治思想>

- ◎ 思想……人間の共同生活を貫く普遍的法
 (蘭、1583-1645) = “国際法の父”
『 』……国際法・海洋法の必要性を説く
- ◎ ……社会や国家の形成を人民の契約関係で説明
 (英、1588-1679) ……『 』
「万人は万人に対して狼である」＝人間の自然状態
→この状態を避けるために個人はその自然権を統治者に譲渡
→よって人民は君主に服従しなくてはならない
→結果的に、王政復古後の絶対王政を擁護
- (英、1632-1704) ……『 (市民政府二論)』
個人は契約によって自然権を統治者に委ねたが、
統治者が人権を侵害(＝契約違反)する場合には、その契約を破棄できる
→抵抗権(革命権) ……名誉革命を理論的に擁護、アメリカ独立宣言などに影響

< (enlightenment) >

- 全ての伝統的偏見・不合理な制度を、理性によって批判
→フランスで開花し全ヨーロッパに広がる
(ドイツ・ロシアなどでは啓蒙専制君主による“上からの近代化”)
- (仏、1689-1755)
1748 『 』……三権分立を説く
- (仏、1694--1778)
1717-18 バスティーユに投獄(政治批判パンフレットの著者と疑われる)
1731 『 (イギリス便り)』
イギリス議会議事政治礼賛＝フランスの旧制度批判
キリスト教批判(聖書は原始文明の産物、教義は争いと分裂の原因)
- 1750-53 プロイセンのフリードリヒ2世に招かれサンサーシ宮殿滞在
晩年、「フェルネー(スイス国境付近)の長老」……当代最高の文化人と称される
- (仏、1712-78、ジュネーヴ生)
文明の進歩こそ不幸の原因……「自然に帰れ」
→この点で他の啓蒙思想家と大きく異なる
- 1755 『 』
平等な原始社会→私有財産制・文明社会の中で不平等が発生・進行
- 1762 『 』
人民が十分な情報を持ち、直接民主制で党派を組まずに議論し、
公共的利益をめざす「一般意志」を形成→人民主権の国家。
- 1762 『 』……教育論的エッセー
従来の教育は社会的不平等への適応のためのもの
→社会の悪影響を退け、子どもが元来持つ自然の善性を守り育てる

※オペラも作曲(「結んで開いて」の旋律)、百科全書でも音楽の項目を執筆

- ※『 (Encyclopedie)』……1751-72、本文17巻、図版11巻
単なる辞書を超えた思想史的意義
国王の専制政治と、教会の愚民化政策を、理性の力で覆すために
合理的・実証的な知識体系の普及をめざす
- ↓
百科全書派(アンシクロペディスト、Encyclopedistes)
 (仏、1713-84)、 (仏、1717-83)
ヴォルテール、モンテスキュー、ケネー、テュルゴーらも協力したが
主には若手の学者たちが執筆(現在の百科事典も同じ)

<経済思想>

- ◎ ……重商主義政策を自然法思想から批判(physiocracy = 自然の支配)
標語「 (laissez faire、為すにまかせよ)」
- (仏、1694-1774)
ルイ15世寵妃ボンパドゥール夫人の侍医、貴族に列せられ、のち経済学へ
『 』
資本主義の循環過程と再生産過程を説明(「天才的書物」＝マルクスの批評)
国富の増大には農業生産発展が不可欠であり、
そのためには「自然権の所有者である農民」を
「自由放任」で活動させるべき。
- (仏、1727-81、名門貴族、父はパリ市長)
1761-74 州知事として、賦役廃止・税制改革・商業の自由・
救貧制度の確立・農業改革などの近代化推進
- 1774 ルイ16世により、財務長官任命
ギルド廃止・国内関税廃止を実現
- 1776 特権階級の反対で辞職

◎古典派経済学……イギリスでは18世紀後半に産業革命に到達
資本主義経済の原則である自由放任主義の経済学発生

- (英、1723-90)
1776 『 (国富論)』
(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)
- 「労働」こそが富の源泉である(労働価値説)。
「分業」と「各人の利己心に基づく自由競争」が生産力発展の要因。
↓
各人の行動は「神の見えざる手(Invisible Hand)」により調節される。
- ↓
マルサス(1766-1834)、リカード(1772-1823)により確立